子どもの貧困とコミュニティ

**～子ども支援ネットワークの試み～**

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　加藤彰彦（沖縄大学名誉教授）

Ⅰ 子どもの暮らしと貧困について

１、２つの文章（詩と遺書）

〈ねんど〉（小学４年生）

人の心は

ねんどのようだ

ほっとかれたねんどは

いろいろかわる

かたくなる

人の心と

おなじじゃないか

（1975年）

〈遺書〉（中学２年生）

話し相手といったら

ハムスターぐらい

でも返事もしてくれない…

ぼくは生きている間、1っだけ

 1っだけつくりたいものがあった

 それは心から話しあえる友達が

 ほんとうにほしかった

 1人でいい、1人でいいから、

 そういう友達がほしかった

(1979年)

　２、子どもが生きていくための諸資本

　　・ 経済資本　　　　　　・ 身体の健康

　　・ 文化的資本　　　　　・ 学ぶ環境

　　・ 社会的関係資本　　　・ 多様な人間関係

　３、マズローの欲求説と成長要件

 ・ 豊かな人間関係（出会い、憧れ、模倣）

　　・ 多様な生活体験（さまざまな文化、暮らし体験）

Ⅱ 子どもの貧困（孤立化）とコミュニティ（１）

１、横浜、寿地区での子どもの現状と対応（1972年～1982年）

　＊ 日雇い労働者の街での暮らし

　　・ 日雇い労働（不安定就労）の実態

 雇用保険、失業保険、休暇、退職金、医療保険、

　　　 ボーナス、昇給、年金など

　＊ 子どもの養育対応

　　　 子どもホールの設置、ことぶき学級、子ども食堂、

　　　 共同保育、学童保育

 ＊ 地域と学校との連携

　＊ 「浮浪者」殺傷事件と子どもの居場所

Ⅲ 子どもの孤立（貧困）とコミュニティ（２）

１、沖縄における子どもの孤立化対応（2002年～2014年）

　＊ 子どもの現状

　＊ 子どもの実態と実践の交流（子ども研究会）

　＊ 『沖縄子ども白書』（2010年）

　　 　子ども支援ネットワーク交流会

　＊ 『沖縄子ども貧困白書』（2018年）

　　 　子どもの貧困実態調査（小・中学生、高校生、乳幼児）

２、「子ども元気ROOM」の活動と対応

　＊ 沖縄の少年非行と子どもの貧困

　　　 母子世帯の出現率

　　　 深夜徘徊等補導人数

　　　 中学卒業後、進路未決定率2.9％（全国0.9%）

　＊ 貧困の子どもたちは、塾にも行けない、学童保育にも行けない、友達も

少ない、家には親がいない、学校にも地域にも居場所がない

　　＊ 学業についていけない➞授業がわからない➞学校がつまらない➞

　　　 不登校、非行になる➞高校に行けない（行っても中退する）

　　＊ 町内に二ヶ所「元気ROOM」をつくる

　　　　 午後10時まで送迎する、支援員2名

　　　　 こども課職員、教育委員会、社協職員（休日なしで運営）

　３、自治会の「子どもの支援部会」

　　＊ 中学校区コミュニティ推進委員会

　　＊ プラットホームとなる場が不可欠（自治会）

　　＊ 継続することが重要（乳幼児から青年期へ）

　　＊ コミニティワーカーの存在

　　＊ 地域として支援をするしくみづくり

Ⅳ 子どもの貧困（孤立）とコミュニティづくり

　　 生きる現場としての地域（包括ケアセンター）